

〈第三項〉論で新しい授業をつくる

作品の〈いのち〉と、聴き手の〈いのち〉が葛藤の〈向こう〉で響き合う (田中実)

文学研究の読書行為は「出来事」で〈語り手〉は何かを〈聴き手〉に語ります。そこでは、〈死ぬべき命の価値・生きることの意味〉の〈問い〉と直接向き合っているのです。

しかし、本来的に制度を内在させている国語教育は、文学研究に常に撃たれることで、「文学教材の力」を発揮させることができるのです。

これが「架ける会」設立しなければならなかった核心の理由です。

中村 龍一 (代表)

- 1 **初読** 「読むということ」は〈聴き手〉は作品に連れ去られることです。〈聴き手〉が作品世界を生きることによって読書行為は現象します。「読むということ」は、〈聴き手〉一人ひとりの言葉が作った内面のドラマを辿ることです。つまり、〈聴き手〉のこれまでの常識が壊されていく「動的過程」を読むということになります。「謎や不思議」がその手がかりです。

「分かるということ」は「理屈」のリアルで分かること、「体感的」なリアルで分かること、それを超えて現象する〈そんなことがあるような気がするリアル〉(宮澤賢治『注文の多い料理店』序文)の三つのリアルがあると、私は考えています。

- (1) 心に残った処を引用し、視写する。
- (2) なぜ、「そこが心に残ったのか？」と、その理由を書く。(理由〈聴き手〉一人ひとり違うから)
- (3) それぞれが「心に残った処とその理由」を互いに読み合い、話し合い、読む度に書き直すことで、「課題」は〈聴き手〉一人ひとりの中で深まっていく。(国語科の学力の中核は「読んで書く力」)

- 2 **再読** 「できごと」の終わりまでを知って、つまり物語を死んで、初読で生まれた「不思議や謎」の(《他者性》)の意味を考える再読が始まります。〈そんなことがあるような気がするリアル〉(〈言語以前〉)の〈読み〉の世界観で、「理屈のリアル」・「体感的リアル」(「言語以後」)を抱え込むのです。(「狼の森・筑森・盗人森」・「川とノリオ」・「ないたあかおに」を例に)これが文学の授業の現場です。作品の叙述(文章)に、これまで気づけなかった〈仕組み・仕掛け〉を発見した時、新たな意味世界が現象します。意味の発見は自己発見(これまでの自分の価値観が壊れるからです)。

つまり、「〈第三項〉論」は分からないことの〈問い〉に対する読みの「手だて」の提案と言えます。(須貝千里)

- (1) それぞれの登場人物の相関関係を読者も生きてみる。自分のこととして想像できる限界ギリギリまで思い描くことで、〈向こう〉からの後光が、「理屈・体感」を超えて「〈原文〉の影」を現象させる。(ここでは先生も子どもも同じ立場)
 - 人物たちの〈心の物語〉のすれ違いに生まれる「なぜ？」〈仕組み・仕掛け〉を問う。
 - 子どもたちのどんな〈読み〉も大切にする。
 - 再読で考える「課題」は2〜3でいい。再読は叙述のすべてをつぎ込んで考えることだから。

(2) 「できごと」(物語)の外部から、言い換えれば舞台上の登場人物たちの「内面のドラマ」の相関関係に生じた〈了解不能性〉を、客席の位置から見えた世界が〈聴き手〉自身の〈問い〉となったとき、文学作品は教材となる。(そのためには戸惑うことこそ・分からないことに、読者が振り回されることが大切なのだ(須貝千里))。

心許し合える温かい・溶け合う教室(村上春樹)は〈ことば〉がつくる

- 「Aちゃんは どうして、ここをこう読んだのだろう」
「私はここがどうしてもわからないんだ、ここどう思う」
- 「ああだろうか、こうだろうか、ああでもない、こうでもない」
「あなたの言ってることはこういうことですか」
「私はそこをこう考えたのですが、あなたは どう思いますか」
- 「この作品はなにが問題なんだろう」
「このお話、まるで私のことみたい」
「私だったら、どうするかな」